

研究種目：若手研究（B）
研究期間：2007～2010
課題番号：19730338
研究課題名（和文）
外傷や疾病等による外貌損傷者の生活支援システムに関する社会学的研究
研究課題名（英文） A sociological study about the life support systems for the person of exterior damage by wound or illness
研究代表者
的場 智子（MATOBA TOMOKO）
東洋大学・ライフデザイン学部・准教授
研究者番号：40408969

研究代表者の専門分野：社会学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：熱傷、身体、外貌、スティグマ、まなざし、患者団体、self help、韓国

1. 研究計画の概要

目的：疾病や不慮の事故、外科手術等のために変化した外貌に関して、近年わが国では形成外科治療に加え、メディカルメイクやかつら、人工装填物（エピテーゼ）など、医療以外の技術も進められ、もとの姿に少しでも近づけるような技術は進歩してきている。しかし社会の人々からの好奇、嫌悪、同情の視線はいまだに変わらず存在し、外貌の変化による自己イメージの崩壊は、引きこもりや社会関係の遮断、断絶に繋がっていることも多く、精神的なサポート、就労支援、また社会の側のさらなる理解を得る活動も必要とされている。そこで本研究は、疾病や外傷のために外貌を損傷し、Body Imageの変容をきたした者が life（生命・生活・人生）を再構築していく上で当事者たちが求めるニーズを把握し、諸外国の先進事例からも学び、わが国の社会文化的背景も考慮に入れた、彼らが必要としている生活支援システムについての発信を目的とする。具体的には、熱傷体験者や、癌治療の副作用で身体の一部、頭髮、体毛を失った者などに焦点を当て、彼らが社会生活を再開する上で必要とするサポート、社会の人々の彼らに対する理解を目的とした啓蒙・教育はどう行われているのか、またそれは誰によって、いつ提供されるのが望ましいのか、当事者・医療者だけでなく社会システム全体を視野に入れたマクロな視点から捉えることをめざす。

内容：通常、外貌を損傷した者についての研究は、医学的観点から言及されることが多く、いかに治療で美しくなるか、元の姿に近づけるかが中心に置かれていた。しかし、本調査研究では、社会構造や医療システム、社会保

障制度、医療制度といったマクロな視点で外貌損傷者のおかれた状況を把握すると共に、外貌損傷者の「生活」、当事者や家族の語りに広く、深く向かい、採集していくことを目指す。たとえば患者・家族と医師・医療機関との日常的な関係のありようにまで降り立ったうえで、詳細な語りと出会うことを目標としている。そのうえでどこにどのようなニーズがあるのかを、文献資料と当事者へのインタビューをもとに解釈し、諸外国の事例も参考にして、今後わが国の外貌損傷者が少しでも生活しやすい社会を作るには、どのような生活支援システムが必要で、それに向けた社会の側の対応、患者―医師関係、家族関係があり得るのかなどを構想していく。

2. 研究の進捗状況

外傷や疾患治療後の傷あとという、生得的でない外貌の損傷は、当事者にとってはその後の人生に大きな影響を与える。医療現場においては疾患や外傷自体の治療が第一の目的とされ、当事者が治療後社会へ復帰していくうえで必要となるフォローまではまだ手が及んでいないのが現状である。本研究では、外貌を損傷した者のなかでも特に「やけど体験者」に焦点をあて、日本で唯一の熱傷体験者の団体である「熱傷フェニックスの会」について文献資料と聞き取り調査から、会が結成され現在に至るまでの団体の変遷と現在抱えている課題について整理した。「熱傷フェニックスの会」は2001年に設立され、それ以来熱傷協会からの支援を受けてきたが2007年度に熱傷協会の解散が決まり、資金面での支援だけでなく物品、事務所スペースの提供も受けていた会にとっては専門職からの自律も含め、会そのものの建て直しを迫

られている。一方、熱傷による外貌損傷は、当然のことながら日本だけの問題ではなく、同じアジアにある韓国でも熱傷患者に対する支援状況について現状を把握することに努めた。世界でもっとも熱傷患者を年間多数受け入れている漢江誠心病院の社会福祉士にヒヤリングを行い、韓国及び誠心病院の熱傷患者に対する社会的サポートについてのこれまでの取り組みについて調査した。また（熱傷・家族・社会復帰・生活）などをキーワードとする韓国で発表された学位論文および韓国内出版物から、熱傷に関係した社会系学術誌から資料収集を行った。重傷熱傷体験者に対するグループカウンセリングを施した研究、重傷熱傷体験者の心理社会的問題に対する社会福祉士の介入に関する研究、重傷熱傷体験者の QOL に対する医療社会福祉士のニーズに関する研究などがあり、わが国の医療社会福祉領域では、重傷熱傷体験者に対するここまでの実証研究が行われていないため、今後のわが国の研究、実践においても大変有益な資料を得ることができた。

3. 現在までの達成度

③やや遅れている。

（理由）本研究では外傷や疾病による外貌損傷者を対象としている。外傷の対象である重傷熱傷については日本、韓国においてかなりの資料は収集できつつあるが、韓国の熱傷対策が予想以上に進んでいたためにそのフォローに追われ、疾病による外貌損傷者についての対応が遅れてしまっている。

4. 今後の研究の推進方策

2010 年度からは、本研究を継続・発展させ、対象を精神障害者、外貌損傷者とし、スティグマを伴う障害をもって生活する人々の困難を社会生活の実態に基づいて検討する研究課題「スティグマを伴う障害をもって生活する人々の生活支援システムに関する社会学的研究」を基盤研究(C)として実施する。外貌損傷者、精神障害者はともに、社会からのスティグマが社会生活再開の障壁になっているところで共通している。精神障害者への偏見、スティグマ解消も容易とはいえない現状であるが、精神障害者のスティグマ克服に向けたさまざまな取り組みは、外貌損傷者に向けられたスティグマ解消に応用できる部分は多いと考える。今年度は障害者（身体障害・知的障害・精神障害）や HIV/AIDS やハンセン病などの疾患、さらに人種や民族などに関わる分野の「スティグマ」、そして「ソーシャルサポート」「地域生活支援」「セルフヘルプ」に関する文献の検討、および調査に向けた準備を行う。

5. 代表的な研究成果

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 6 件）

- ① 的場智子、「정신 장애인시설과 지역커뮤니티에 관한 고찰—도쿄도 이타바시구의 사례로부터」、『아시아 경제위기 이후 사회복지의 발전』、2009 (1)、549-552、2009 年、査読有
- ② 的場智子、小澤温、内田祥士「クラブハウスモデルによる精神障害者地域生活支援システムの現状と動向—韓国における実践事例から」 ライフデザイン学研究、東洋大学ライフデザイン学部、5 巻、467-470 2009 年 査読無
- ③ 望月美栄子、山崎喜比古、菊澤佐江子、的場智子、八巻知香子、杉山克己、坂野純子「こころの病をもつ人々への地域住民のスティグマおよび社会的態度—全国サンプル調査から—」厚生指針、第 55 巻 (15)、厚生統計協会、6-15 頁、2008 年、査読有

〔学会発表〕（計 1 件）

- ① 的場智子「정신 장애인시설과 지역커뮤니티에 관한 고찰—도쿄도 이타바시구의 사례로부터—」韓国社会福祉学会 2009 年 4 月 25 日 韓国・崇実大学校

〔図書〕（計 2 件）

- ① 的場智子「生活と福祉」最新介護福祉全書 2 『人間と社会 社会の理解』小澤温・秋元美世編、第 1 章 1-34 頁 2008 年 メヂカルフレンド社
- ② 的場智子「周囲の人々との関係Ⅱ：サポートネットワーク」『薬害 HIV 感染被害者遺族の人生』山崎喜比古・井上洋二編 7 章 137-146 頁 東大出版 2008 年